

大学

学校推薦型選抜(公募制)

志願理由書

志望学科

学科

氏名

1200字程度で書いてください。自書のこと(印刷・貼り付け不可)。

私は言葉では表現しづらい「死」を美術であれば「イメージ」によって表すことができるのではないかと考える中で、美術における死の表現に関心を持つようになった。貴学では上記の問いを吟味し、研究したいと考えている。

人類にとって「死」が平等に訪れることは紛れもない事実である。しかし思考する主体としての私たち自身が体験することはできない。そのため「死」という未知の領域に対してこれまで多様な解釈がされてきた。貴学では哲学・思想史と美学・美術史を複合的に学ぶため、美術における死の表現を研究しながら、歴史の流れとともに先人たちによって生み出されてきた死の多様な解釈についても学ぶことができる。貴学にはハイデガーを中心にドイツ哲学を研究されている

教授が在籍しているので、ハイデガーの述べた人間の有限性についてより詳しく学ぶことで、近代哲学的な「死」の解釈を深めることができると考えている。また私は19世紀から20世紀にかけての西洋美術の変遷に興味を持っている。なぜなら、その時代は美術様式が次々と生まれ変わった。そうしたカオスで流動的な時代にも「死」を表現した作品が多く存在する。その作品が人々を魅了した背景に何かあったのかを突き止めた。入学後は教授のもとで、死の表現と社会の関係についての学を進めたいと考えている。

私はバクシンスキーの画集を始めて開いたとき、脳内をかき混ぜられるような感覚に陥った。「死」は日常的なものではないため、忘れがちなものであるが、日常から影のようについて回るものだ。私は「死」を生きたまま映し出し、見る者を引き込ませるバクシンスキーに興味を持った。彼の生きた時代は抽象絵画やシュールレアリスムが全盛である一方で、ポップアートやコンセプチュアルアートを迎え入れるなど、美術形態の革命が起きている時代だ。しかしバクシンスキーの精神気質は20世紀の画家であってもコンサバティブで、むしろ19世紀の画家のような落ち着きを感じさせる。彼の作品は20世紀を生きた経験から成る習得観念と純粋な生得観念の狭間で構成された独自のイデオロギーによって成立しているように感じる。私は様式や技法を分析し、その作品の主題や意味、内容を考察することで、バクシンスキーの作品が美術史の流れの中でどこに位置しているのか、また彼に内在していた「死」のイメージはどのように変遷されていたのかを明らかにしたいという意志を持っている。

私はイメージによって本質を表そうとする「死」をテーマとした作品を観る際に、シュールレアリスムや抽象表現主義などの芸術知識と政治や宗教などの背景知識を複合させた視点をも身につけたいと思っている。大学に入学後、絵画史、彫刻史、日本美術史、西洋美術史などを学ぶにあたり、自分自身の目で作品に触れられ、多くの資料にも触れられる環境がある点に貴学の魅力を感じ、志望した。